

『備えられた出会い』 ヨハネ4:1-9

4:1 イエスが、ヨハネよりも多く弟子をつくり、またバプテスマを授けておられるということ、パリサイ人たちが聞き、それを主が知られたとき、

4:2 (しかし、イエスみずからが、バプテスマをお授けになったのではなく、その弟子たちであった)

4:3 ユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。

4:4 しかし、イエスはサマリヤを通過しなければならなかった。

4:5 そこで、イエスはサマリヤのスカルという町においでになった。この町は、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにあったが、

4:6 そこにヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れを覚えて、そのまま、この井戸のそばにすわっておられた。時は昼の十二時ごろであった。

4:7 ひとりのサマリヤの女が水をくみにきたので、イエスはこの女に、「水を飲ませて下さい」と言われた。

4:8 弟子たちは食物を買いに町に行っていたのである。

4:9 すると、サマリヤの女はイエスに言った、「あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤの女のわたしに、飲ませてくれとおっしゃるのですか」。これは、ユダヤ人はサマリヤ人と交際していなかったからである。

●序論

このヨハネの福音書4章前半に、井戸のそばでのイエスさまがサマリヤの女と対話する物語が描かれています。

そしてこの7節に二人の出会いと最初の会話のきっかけがあるのですが、その出会いに至るまでの背景を、聖書はわざわざ記しています。まずそこに、目を向けて行きます。

今お読みした物語の到着点は「出会いが備えられていた」ということです。

「人生は出会いで決まる」女性はそういう経験しています。

それは、彼女が、はじめからそう願っていたことではありません。

のちにわかることですが、彼女自身が求めた「出会い」では、多くの傷を負ってきた人でした。

そんな彼女は予期せず、井戸のそばで、見知らぬ人から声をかけられた。それにしびしび応えていった…そんな雰囲気は漂う状況です。

しかし、その出会いを、そしてその出会いのために…と言っていいくらいに、イエスさまは導かれてこの所におられ、彼女への出会いを演出されました。

ここに、わたしたち人の側では見ることも、意図することもできない、神さまのご計画の不思議な備えがあります。

そう、それは他人ごとではありません。実は、わたしたちもそういう「神さまの側で備えてくださった出会い」を経験して、今ここにいます。

●本論

I. ユダヤを離れる不思議

イエスさまは、あのバプテスマのヨハネよりも多くの弟子たちを集めるほどでした。しかし3節では、一転イエスさまは、そんな宿された場所を離れ去ってしまいます。何かあったからか？、しかしそこに理由を記していません。

4:1 イエスが、ヨハネよりも多く弟子をつくり、またバプテスマを授けておられるということを、パリサイ人たちが聞き、それを主が知られたとき、

…

4:3 ユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。

書かれているのは、イエスさまが多くの人々の関心を集め、弟子たちができていたことを、当時の宗教的な権力を持つ指導者たちが聞いた、…ということイエスさまは知ったということでした。

今飛ばして読んだ2節

4:2 (しかし、イエスみずからが、バプテスマをお授けになったのではなく、その弟子たちであった)

その彼らの耳に届いていた情報には誤りがあるのだが…という、筆者ヨハネの補足です。わたしたちには正しく認識しておいてほしいと思ったからでしょうね。

いずれにせよ、そこに「そういう理由で…」という風な表現はありません。

ただ、わたしたちがこの聖書をすなおに読んでわかること、それはイエスさまがそういう状況下の中、イエスさまのご判断であえてその場所を去ることにこだわりはなかったということです。

「…それを主が知られたとき、…ユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた」と。ただその先に、あのサマリヤのひとりの女性との出会いが備えられていました。

そこにイエスさまの側の、神さまの側の不思議を想うのです。

そしてユダヤでなければならない、今の成功を捨ててはならない…というこだわりなどない、神さまの導きに従うイエスさまの自由な心と行動を想い見るのです。

Ⅱ. サマリヤを通る不思議

ユダヤからガリラヤへ、普通に最短で行こうとするなら、どうしてもサマリヤの地を通らなければならない。しかし、そこに住まう人たちは、歴史的な背景から、ユダヤ人たちが忌み嫌い、軽蔑する人々が住まう土地であるということでした。

当時の常識的なユダヤ人たちは、大きく遠回りをしてでもその地を避けるというルートを取っていたのではないかと、言われています。

しかし、イエスさまはそのサマリヤの地を通られました。弟子ヨハネは記します。

4:4-5 しかし、イエスはサマリヤを通過しなければならなかった。そこで、イエスはサマリヤのスカルという町においでになった。

その理由を具体的には記してはいません。

しかし、そこには神さまの側の必然があったことを表現しています。

そして推して知るべし、そこで、あのサマリヤとの女性との出会いが備えられていたということです。

ここにも、不思議に見えるありさまがあります。

当時の常識と言われていた行動に” こだわらない” で、ただ神さまが導き用意してくださっている” 出会い” に向かう、イエスさまのお姿です。

Ⅲ. サマリヤの女性に声をかける不思議

その不思議は、当の声をかけられたサマリヤの女性が驚くほどでした。

4:9 すると、サマリヤの女はイエスに言った、「あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤの女のわたしに、飲ませてくれとおっしゃるのですか」。これは、ユダヤ人はサマリヤ人と交際していなかったからである。

ユダヤ人とサマリヤ人には、長い歴史の中での遺恨が残っていました。

そんな遺恨やこだわりなどないかのように、イエスさまは実に自然にこの女性に声をかけておられます。

4:7 ひとりのサマリヤの女が水をくみにきたので、イエスはこの女に、「水を飲ませて下さい」と言われた。

見るとおり、そこにこの女性が来たので、イエスさまは当たり前のように、水をくださいとお願いしたのです。

こうしてここに、神さまの側が備えてくださっていた出会いがあったのです。ここから物語は始まります。

外から見ると偶然でしょう？と見えるようなこのイエスさまとサマリヤの女性の出会いを、神さまの側で備えられていた出会いであることに、心を惹きこまれます。

もし、自分にこだわるならば、多くの弟子を集めていたユダヤの地を離れることも、サマリヤを通ることも、そこで女性に声をかけることもしなかったことでしょう。しかし、イエスさまはそんなこだわりから離れて自由でした。この女性に対しても自然に接することのできたイエスさまの不思議、それこそ神さまの側の不思議です。

その不思議を表現するイエスさまのありさまをパウロはこう表しています。

ピリピ2:6-8(LB)

キリストは神であられるのに、神としての権利を要求したり、それに執着したりはなさいませんでした。かえって、その偉大な力と栄光を捨てて奴隷の姿をとり、人間と同じになりました。そればかりか、さらに自分を低くし、犯罪人と同じようになって十字架上で死なれたのです。

このようなイエスさまが来られて、この地上での歩みの中で、あのサマリヤの女性との出会いがあり、あのザアカイとの出会いがあり、あの盲人や病の人、らい病の人たちとの出会いがあり、そして、わたしたちとの出会いがあるのです。

さいごに)

先日、引退された仙台神召キリスト教会の川上良明先生、まさ子先生の記事。

この先生ご夫妻は、堺キリスト教会で祝福された伝道を進めておられました。

しかしごそんな先生に辞令があり、仙台への異動がなされたのです。その時は、その教会はもちろんのこと、教区にもある意味で驚きとショックが走りました。

それから間もなく、不思議なニュースが飛び込んできました。

奇跡が起こり、その教会で一度に27名もの洗礼者が起こったと。先生が遣わされた仙台教会には川崎伝道所がありましたが、その伝道所では、関西から来た牧師という理由で、当初川上先生たちを拒絶したようです。

先生の手記にはこうありました。

…ところがその時(自分たちが遣わされて) からピッタリと彼らは、来なくなつた。それは、以前、関西のやり方に対して苦い経験をしていた彼らに、関西からの牧師と聞いて大変心配したのであろう。「私たちが来て欲しいと言うまで、来ないでくれ」と言うことであった。

私たちはこのことを知ったとき、霊的な戦いを感じ、…祈り始めた。

そして今回の引退手記には、そんな状況が一転する奇跡を記しています。

…そんな時、川崎伝道所の子供が大怪我をして私たちに祈りの要請がありました。草刈り機で子供の側頭部を裂傷、生死を分ける怪我でした。仙台教会で特別祈禱が行われ、奇跡的に命が助かりました。この出来事で川崎の信徒は信仰復興され、その年の夏には27名の集団洗礼式が行われました。また日曜礼拝・祈禱会などが再開され、仙台教会にも大きな影響を与えました。

わたしが牧師になってから2年後に、堺の教会を離れた先生ご夫妻。寂しさやこだわりはなかったのかなあ…、と思うほど、先のイエスさまの姿にあったように、さらっとそこから異動されたように見えました。

しかしそこで、拒絶されるような経験をしておられました。

しかし、そこにこそ神が備えてくださっていた出会いがあった、ハレルヤです。

わたしたちはどうでしょうか？ わたしたちの人生と、日常生活の中にも、神さまの用意してくださっている不思議があります。

それは当初、あまり受け入れたくない、釈然としないというように思うこともあるかもしれませんが。そこで神さまの導きを問いつつ、歩みましょう。

その不思議が、わたしたちがまだ知らない、会ったことのない、「備えられた出会い」につながる、神さまの御業につながることを経験することを期待できます。